

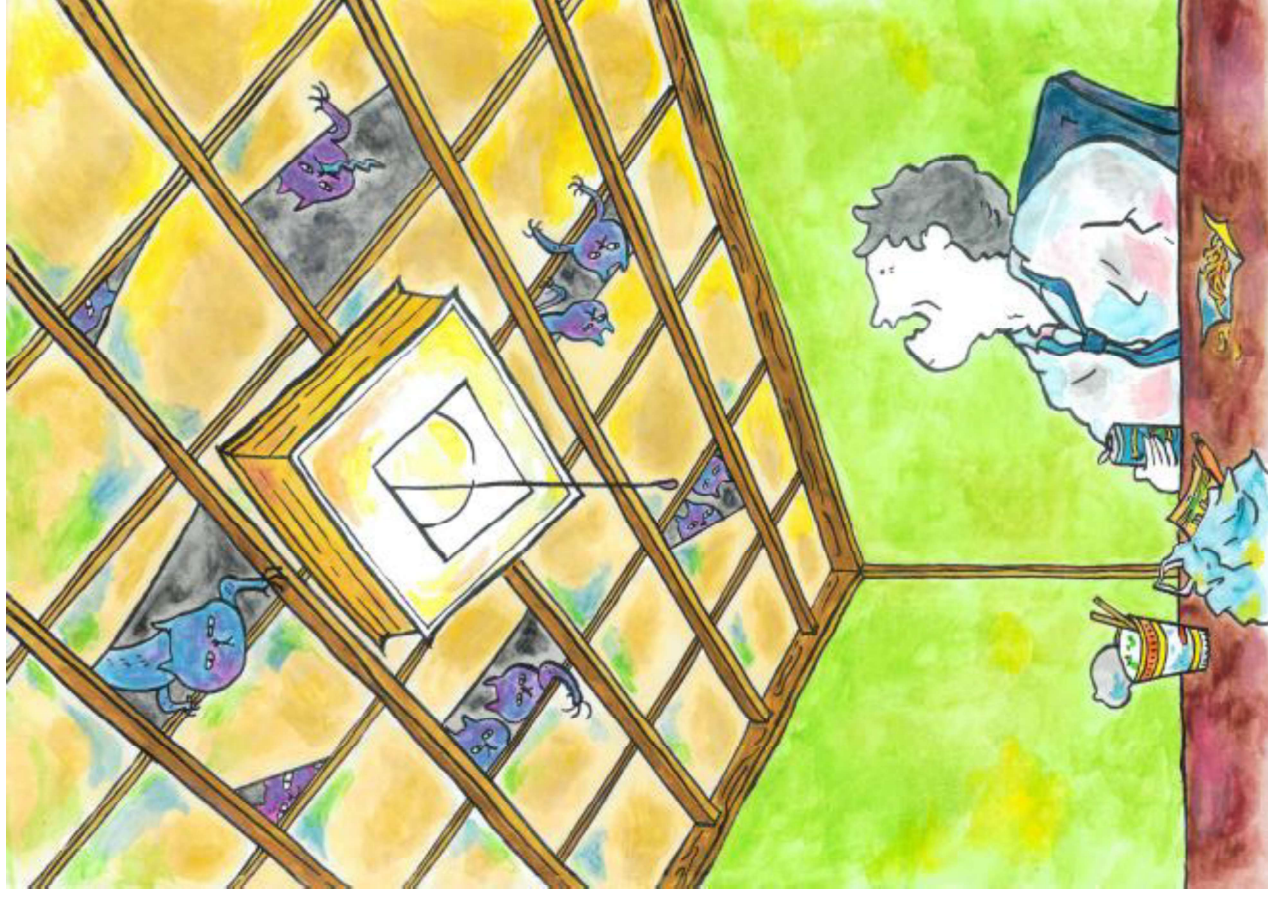
レベル
3

ようかい となりの妖怪



てんじょうねこ

寒い部屋で一人で寂しくしている時、
天井から「にゃあ」とかすかな鳴き
声が聞こえてくる。よく見ると天井
の隙間から顔を出している小さな子猫
が「にゃあ」と鳴いている。寂しい夜
なので、「あら、こんなところに」と
思ってもう一度よく見るともういなくな
っている。しばらくしてまた「にゃ
あ」。てんじょうねこのしわざであ
る。



うきわぼうず

なつ おおあめ ふ まち こうずい
夏に大雨が降って町が洪水になる。

きんじよ いえ なか みず はい
近所のひとたちは家の中に水が入らな

いよ う 忙しい している。その横で

「すずーい、すずーい」と言いながら

みずぎ う わ すい えいぼう
水着に浮き輪、水泳帽をかぶった

い もの みず およ
生き物がたまたま水を泳いでやってく

る。近所の人たちは手を止めて「あら

あら」と言いながらも楽しそうに眺め

ている。うきわぼうずはその様子を

たしか みず もぐ
確かめると水に潜っていなくなって

しまう。



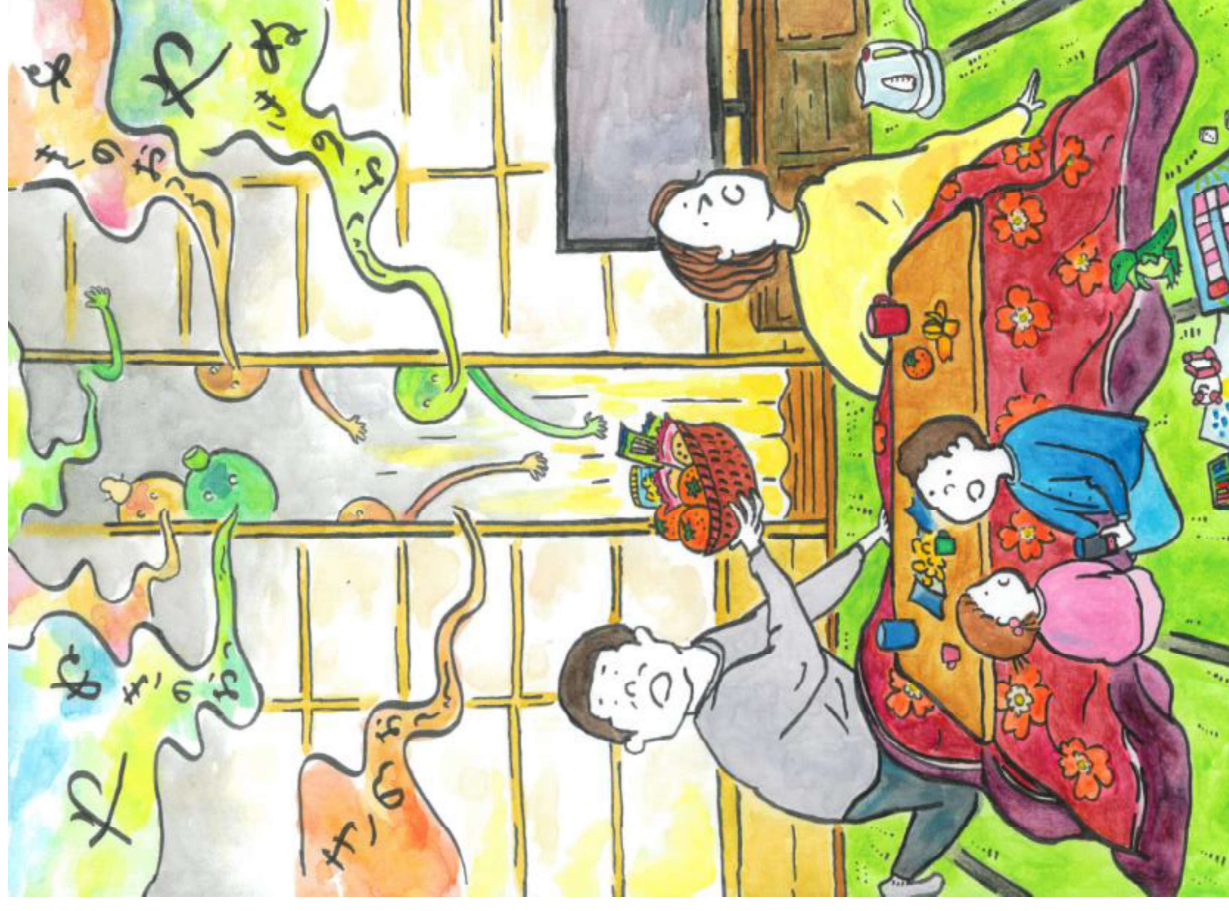
おちやにこおり

あつ 暑ーい夏の夜、夜中にのどが渴いて目
さ 覚める。水を飲もうと台所に行く
こぞう 小僧が湯呑をだして「お
ちやにこおり」と2回言う。湯呑にお
ちや い こおり た 茶を入れて氷を足してやると、もう
いちど 一度「おちやにこおり」と言ってどこ
かに行ってしまう。湯呑にお茶を入れ
てやらないと、いつまでもそこにい
みず の ず、水を飲むのを邪魔するという。



やぬきのおつ

ふゆ 冬の夜、こたつに入^{はい}っているとどこか
こえ 声が聞^きこえる。「やぬきのおつ
こえ う、やぬきのおつう」声^{こえ}はそう言^いって
いる。こたつの上^{うへ}にのっているせんべ
いやみかん、あめなどをおさ^おらにいれ
て障子^{しょうじ}の外^{そと}に置^おいておくとな^おくなって
いるという。これ^{こゝろ}をしない^きと、いつま
でも声^{こえ}が聞^きこえる。幼^{おさな}い時^{とき}におや^おつ
がもらえな^{こども}かった子供^{こども}たちの気持^{きもち}ちが
あつ 集^{あつ}ま^あって妖怪^{ようかい}にな^いったと言^いわれ^いてい
る。



かたたたき

さむ ふう 寒い冬の夜、 幼い子供といっしょに
ね 寝ている母親が誰かに肩をトントンと
たたかれて目が覚める。ふと見ると
いっしょ 一緒に寝ている子が足で布団を蹴飛ば
して寒そうに縮こまっている。母親は
かぜ 風邪をひかないよう、子供に布団をか
けてやる。大切な人を見守る、優しい
ようかい 妖怪のしわざである。



ありのみち

夢^{ゆめ}の中^{なか}で「手がいたあ、手がいたあ
い^{だれ}」と誰^{たれ}かがささやいてい^ある。目^めを開
けると、壁^{かべ}の穴^{あな}からた^{あり}くさんの蟻^ねが寝
てい^{ひと}る人^{ひと}の手^てを食^たべに來^きてい^きる。どん
な人^{ひと}の手^てを食^たべに來^くるのかはわからな
いが、妖怪^{ようかい}「ありのみち」が蟻^{あり}を連^つれ
てき^いてい^いるのだと^い言^いわれてい^いる。



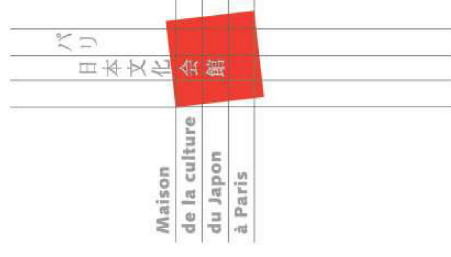
となりの妖怪レベル3

2024 年 9 月 1 日 発行

編著：三浦多佳史

挿絵：中川歩美

監修：MCJUP ぼくよむ文庫制作チーム



国際交流基金パリ日本文化会館日本語事業部